

貂蟬は西施、楊貴妃、王昭君と並び、中国の四大美女とされています。また、「三国志演義」(注1)では、後漢末ごろ、群雄が割拠し紛争する中、貂蟬は、王允の「連環計」(注2)の策略に協力し、暴君の董卓を滅ぼした重要な人物として、人々に良く知られています。そのほか、中国の文学作品、劇、民間の伝説の中には彼女についての物語が、数え切れないほどあります。

注1 紀元2世紀から3世紀の後漢末、群雄割拠の時代から、魏(曹操)、吳(孫権)、蜀(劉備)が覇権を争って、それぞれが建国するまでのいきさつとその滅亡の経緯を、いろいろな挿話を織り込んだ物語として、明代の羅貫中が纏めた。中国では「三国演義」または、「三国通俗演義」といわれている。

注2 当時、横暴の限りを尽くす董卓を見かねた王允が、王允の家妓であった貂蟬を使い、董卓とその養子である呂布と仲たがいをさせ、勇猛無比をもって鳴らす呂布に董卓を誅殺させた。家妓：家で雇われている妓女。

残念ながら、正史では貂蟬の生年月日や出身地や、後半生の行方などに関する資料は殆ど見られませんので、彼女は架空の人物だといわれたりしています。

しかし、山西省には、貂蟬の故郷とされるところがあります。山西省太原市から北へ70キロ離れた所に忻州市というところがあり、その忻州市の近郊に「木芝村」という小さい村があります。その村のお年寄りたちの話では、貂蟬はこの村に生まれ、任と言う苗字で、彼女は少女の頃、宮女として選ばれ、高官の帽子である「貂蟬冠」を管理したので、貂蟬という名前と呼ばれていたそうです。

伝説では、貂蟬が生まれると、村の桃の花や、杏の花などがその美しさに恥じて三年間も咲かなくなり、また、貂蟬が月を拝むと、月に住む嫦娥もその美しさに及ばないと感じ、雲の中に早早と隠れたといわれています。

「三国志演義」では、貂蟬は王允の家妓でしたが、「連環計」の策略の結果、呂布と一緒に became ました。その後、呂布が曹操(注3)に殺された後の彼女の行



方については語られておらず、絶世美人の余生がどのようなものだったのかは永遠の謎になりました。

注3 後漢の配下の王国という形で魏国を建国。生存中は、漢の丞相の肩書きで通した。曹操の死後、息子の曹丕が後漢から禅譲を受け帝位に付くと太祖武帝と追称された。

伝説は色々ありますが、桃園で契りを結んだ三兄弟(劉備、関羽、張飛)の一人である関羽が、呂布の死後、

貂蟬を保護して村に戻し、老後まで村で生きたともいわれています。木芝村には、その昔、貂蟬のお墓、廟、貂蟬の劇台、関羽の像、及び王允と名づけられた道などがあったそうです。また、山西省社会科学院の有名な学者が調査し、貂蟬は実在した人物で、「木芝村」が確かに貂蟬の故郷であるとの説もあります。

地元ばかりではなく、山西省の人々の間で「忻州没好女、定襄(注4)没好男」(忻州には、綺麗な女はいない、定襄には立派な男はいない)というような古いことわざが言われたりしています。それは、忻州では

貂蟬のような絶世の美人が生まれ、定襄では呂布のような立派な男が生まれ、地もとの精華を吸い尽くしてしまったので、再び綺麗な女性、立派な男性が現れないという意味なのです。

注4 定襄は定襄県で、忻州市から北へ50キロ離れ、呂布に関する古跡があり、呂布の故里とされています。

陕西省では、陕西省米脂県が美女・貂蟬の故郷として、陕西省綏徳県が勇猛を鳴らした武将・呂布の故郷としても伝えられているようです。こちらでは、貂蟬と呂布の出身地として、「米脂女と綏徳男」といわれ、米脂の女は聡明で賢く、よく働いて美人、綏徳の男は、苦勞をものともせず労働に耐え、身体も立派であるというのだそうです。

歴史に名を馳せた人物が自分達のところから出たことは誇らしいことです。二人とも既に伝説に近い人物ですので、どちらが正しいか詮議する必要はないでしょう。いずれにしても二人は黄土高原と呼ばれている中国僻地の出身は間違いなさそうです。厳しい生活環境に生きる人々にとって、貂蟬と呂布は歴史に名を留めた自分達の輝く星であり、心の支えなのかもしれません。(田井)